

音楽科における指導力の向上をめざした効果的な

教育実習のあり方に関する研究

—生徒指導と教科専門の観点から— (3)

増井知世子 原 寛暁 松前 良昌 光田龍太郎 末廣麻由子
長澤 希 三村 真弓 伊藤 真 枝川 一也

1. 研究の背景と目的(はじめに)

文部科学省は、平成22年3月に、生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書として『生徒指導提要』を作成した。生徒指導は、「一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すもの」とされている(文部科学省, 2010, p.5)。教育活動において求められるものは、「①児童生徒に自己存在感を与えること」、「②共感的な人間関係を育成すること」、「③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること」(同上)の3点である。生徒指導は教育課程全体に位置付くものであり、上記の3つの観点は各教科の授業においても必要とされるものである。教員養成大学において、生徒指導の3観点は、教職専門の教育心理学系授業で教えられることが多い。しかし、それは知識として提示されるものであり、各教科教育法においてそれらの必要性や具体性が示されることは少ない。

そこで、広島大学教育学部第四類音楽文化系コースでは、指導案作成や模擬授業を行うなかで、先述した生徒指導の3つの観点を取り入れるべく指導してきた。その結果、ある程度はそれらの観点が授業のなかで位置付くようになってきたが、逆にそれを重視すると、音楽科としての本質である芸術性が薄くなる傾向が見えてきた。そこで、本研究では、生徒指導の観点と教科専門の観点の両者から教

育実習生の自己評価を分析し、今後の指導に活かすことを目的とする。(三村 真弓)

2. 本年度の研究の視点

7月下旬に、広島大学において、4附属教員と大学教員が集まり、本年度の研究に関する打ち合わせの会議を行った。ここ2年間の研究を振り返っての話し合いの結果、本年度の研究の柱を次の2点とした。

1) ここ2年間の研究で実施した実習生の自己評価表は、附属学校の特色や担当した題材に影響を受けていることがある程度明らかになったため、本年度は実施しないことになった。新たに考案したのは「生徒指導と芸術性抽出シート」である。これは、本研究のサブタイトルに掲げている2つの観点が実現できているとは具体的にどういうことなのかについて、音楽授業のなかから抽出し寄せ集めて、帰納的にモデルとして示すための方策である。実習生はこのシートに「授業のどの場面で、生徒指導の3観点が実現できたか」および「音楽の授業のなかで芸術性が高いと感じられたか」について、自己評価や批評会における他者評価の内容を記入する。

2) 附属学校間の連携は継続してとっていくことになった。昨年度のように、実習生についての所見を数字で評価するのではなく、実習生の長所と課題について、ペアの実習校間で簡潔な記述により情報を共有し合うことにした。(増井 知世子)

3. 「生徒指導と芸術性抽出シート」の分析と考察

(1) 生徒指導の3観点

実習生が行った音楽の授業において、生徒指導の3観点が実現できたと捉えられる場面を抽出した。①児童生徒に自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること、の3つの観点別に記述をまとめる。

①自己存在感

この観点では、「肯定的評価」「意見の共有」「学習支援」「学習活動」の4つの側面において具体的場面が抽出された。

【肯定的評価】

- ・様々な場面で褒める（パート練習／合唱／指揮を見る生徒／合奏／机間指導／学習プリントの記述／生徒の発言）
- ・詳細で具体的な言語的評価に加えて、表情や身振りなどの非言語的評価をする

【意見の共有】

- ・生徒同士の話し合いの場を設定する
- ・発言の機会を与える
- ・よい意見を全体で共有する
- ・生徒の意見をもとに授業を展開する
- ・同じ意見の生徒に挙手させる
- ・発言しやすい自由な雰囲気を作る

【学習支援】

- ・経験に関わらず全ての生徒に指示を与える
- ・到達度の低い生徒に配慮する
- ・スコアを用いて視覚的に補助する
- ・拡大楽譜を用いて色分けするなど工夫する
- ・リズム学習では音符に読み方を加える

【学習活動】

- ・全員で1つの曲を作り上げる
- ・全員が同じモチベーションで取り組むように声かけをする
- ・生徒主導でパート練習を行う
- ・個人練習の時間を確保する
- ・ペア学習、グループ学習を取り入れる
- ・発表の場を設定する
- ・全員ができるまで徹底的に練習する

②共感的な人間関係

この観点では、「肯定的評価」「意見の共有」「学習活動」「関係性の構築」の4つの側面において具体的な場面が抽出された。

【肯定的評価】

- ・よい雰囲気（ノリ、笑顔）を褒める
- ・生徒の発言や演奏にタイミングよく同意したり共感したりする
- ・発表している生徒の目を見て、うなずきや相づちで応える

【意見の共有】

- ・強弱記号がなぜそこについているのか、他者と議論する
- ・パートや小グループで議論した内容を全体で共有する
- ・生徒個々の発言を全体で共有する

【学習活動】

- ・生徒主導でパート練習を行う
- ・パート練習に生徒の意見を取り入れる
- ・パートリーダー以外の意見を求める
- ・教師の一方的な説明に陥らないよう、生徒に質問する
- ・打楽器パートを事例に、各パートの役割を認識させる
- ・1つの音をそろえて出す
- ・クラス全体で歌唱活動をする
- ・他のパートを聴きながら一緒に合わせて歌う楽しさを味わわせる
- ・同じタイミングで出るパートを意識する
- ・ペア学習を行う
- ・生徒同士で歌い方を確認する
- ・比喩的表現を用いて、他者と自己の感覚の一致を図る

【関係性の構築】

- ・授業規律を徹底する
- ・机間指導を行い、生徒とコミュニケーションをとる
- ・指名や指導の際に、生徒の名前を呼ぶ
- ・グループ活動に積極的に介入する

③自己決定の場

この観点では、「環境設定」「意見の共有」「学習活動」「学習支援」の4つの側面において具体的な場面が抽出された。

【環境設定】

- ・生徒が発言しやすい環境をつくる
- ・教師主導型にならないように、生徒の自主的な挙手や発言を求める
- ・責任者との話し合いで授業の方針を決める

【意見の共有】

- ・生徒同士の話し合いで意見交換を行う

【学習活動】

- ・教師がすべての答えを提示せず、生徒に考えさせる（歌い方／足の開き方／目線の位置／練習方法）
- ・生徒主体で練習や音楽づくりを行う
- ・演奏するパートを生徒に選択させる
- ・苦手な部分を生徒自身に取り上げさせ、練習させる
- ・創作の手法を複数提示し、選択させる
- ・鑑賞文を書く対象となる楽曲を選択する
- ・練習を終えるタイミングを決定させる

【学習支援】

- ・学習の流れを視覚化して提示する
- ・授業目標を提示し、取り組むべき課題や到達すべきゴールを明確にする
- ・ねらいの設定と振り返りを行い、学習の見通しを持たせる

（２）音楽の授業における芸術性

実習生の行った音楽の授業のなかで芸術性が高いと感じられた場面について、「指導技術」「指導方法」「評価」「教材選択」の４つの側面において具体的場面が抽出された。

【指導技術】

- ・質の高い模範演奏をする
- ・オーケストラの様々な楽器を具体的に指導する
- ・指揮によって強弱やフレーズ感などの音楽表現を引き出す
- ・表現豊かな伴奏で生徒の歌唱をリードする
- ・言葉ではなく、音で生徒を静かにさせたり、学習への興味をひきつけたりする
- ・日本語、ドイツ語、ラテン語などの歌詞の正しい発音を指導する
- ・卓越したピアノ演奏（あるいは弾き歌い）によって楽曲の説明をする
- ・ピアノを弾きながら生徒の様子を観察する
- ・生徒の創作した旋律に（即興的に）ピアノ伴奏をつけて曲らしくする

【指導方法】

- ・演奏表現について実演しながら説明する
- ・音楽記号だけでなく、歌詞から演奏表現を追求する
- ・曲の一部ではなく、曲全体を鑑賞する
- ・合唱の際に、冒頭の和音をバス→テノール→アルト→ソプラノの順で出させ、そのまま数小節歌わせ、響きの確認をする

- ・オペラの内容を理解したうえで鑑賞する
- ・全員でギターの弾き語りをする
- ・歌唱指導の際に、段階的にピアノを用いる（旋律のみ→旋律と伴奏→伴奏のみ）
- ・教師の生演奏を鑑賞させる
- ・鑑賞の際に、曲に関連する絵画も提示し、芸術としての学習を展開する
- ・変拍子のリズムを認識しやすいように、拍の打ち方を工夫する
- ・ブレスの仕方を丁寧に指導する

【評価】

- ・活動後に適切な評価や課題の提示をする
- ・発声練習の際に根拠を示しながら助言・評価する

【教材選択】

- ・世界的にレベルの高い演奏家の映像や音源を用いる（フィッシャー・ディースカウ／古楽器による演奏）

（３）考察

抽出された内容を見ると、生徒指導の３観点は音楽学習の様々な場面において実現されることが分かる。ここではまず、複数の観点に共通して抽出された場面について述べる。まず、「褒める」場面、つまり肯定的評価を行う場面である。音楽学習には、演奏行為や発言行為、記述行為、その他に音楽学習への積極的態など多様な行動が含まれる。それらに対して意識的に、積極的に肯定的評価を加え、生徒に自己存在感を与えたり、共感的な人間関係を育成したりすることがめざされる。その際には、表面的な評価ではなく、生徒の行動に対して「どこがどのようによかったのか」という具体性が伴わなければならない。音楽学習では学習者は自らの演奏を客観的に捉えることができない。したがって、他者による客観的なフィードバックが重要となる。具体的な評価によって学習者の学習は促進され、それは自己存在感や共感的な人間関係に影響を与える。

肯定的評価の場面が増えると、特定の学習が不振な生徒でも、他の学習場面において肯定的に評価される可能性は高まり、学習へのモチベーションも高まる。また、クラスの雰囲気や学習環境もよい方向へ向かうであろう。その際には、「学習直後に行われる評価的言語的教授行動」（吉富ほか 1999, p. 37）のみな

らず、相づちやうなずきなどの「非言語的教授行動」を伴うことが望ましい。また、評価の対象は具体的な行動に限定されず、その場の雰囲気や生徒の表情も評価されることによって、よりよい人間関係の構築に寄与する。

次に、「他者と意見を共有する」場面も3つの観点に共通して抽出された。自分の意見を発言する機会を得ることは、学習集団への帰属感や構成員としての意識を高め、自己存在感を与えることにつながる。また、話し合いの機会を設定することは、自分と他者の意見を相互に受容し、自分と他者の立場を明確にするものであり、共感的な人間関係の構築につながる。さらに、生徒同士で意見交換する行動には、そもそもその活動への積極的関与が求められ、結果として自己決定の場を与えることにつながる。音楽の授業では、歌唱（合唱）や器楽などの演奏活動の際に、どのように音楽を作り上げていくのがよいか、絶えず他者と議論をする。また、鑑賞の際には、音楽の意味内容について個々が感じ取ったものを他者との議論をとおしてより深めていく。演奏活動や鑑賞には、元来、外的に規定されない個別の音楽的思考と他者との相互作用が含まれる。しかし、学校教育において生徒を対象に音楽学習を形成する際には、元来、活動が内包する自然な音楽的思考や相互作用をめざしつつも、意図的に学習活動として仕組んでいくことが必要である。

生徒指導の3機能を実現するためには、全ての生徒が学習に参加できる手立てを講じる必要がある。音楽学習に必要な技能の獲得レベルは、生徒の音楽経験によって異なる。また、人前で演奏するなどの心理的要因によっても、学習への積極性は変化する。このように、音楽的能力や音楽的態度の程度が多様な学習者集団に対して、いかなる学習支援を行えば全ての生徒が「わかる」「できる」状態になるのだろうか。抽出された場面を見ると、自己存在感を与えるためには、初心者と経験者を分けて、それぞれのレベルに応じた課題設定や課題の指示を行うこと、鑑賞の際にはスコアを用いたり、歌唱の際には拡大楽譜を用いて音楽の要素を色分けしたりするなど、視覚的補助を用いて理解を促進すること、リズム学習の際にはリズム譜の音符にリズムの読み方を言葉で加えること、などの支援が講

じられる。また、自己決定の場を与えるためには、授業の内容や流れを視覚化して提示することによって、今何を学習しているのか、何を学習すべきかを理解させること、授業目標を提示し、課題や到達点を明確にして、学習の見通しを持たせること、などの支援が講じられる。

学習活動に着目すると、音楽科の特質である「クラス全員で同一課題に取り組む」ことそのものが生徒指導の3機能の実現に関係していることが分かる。例えば、「自己存在感」については、全員で1つの音楽を作り上げたり、そのために全員が同じモチベーションで取り組むように声かけをしたりすることが抽出された。また、個人練習、パート練習、全体練習など、異なる集団サイズを往還しながら学習を進めることも自己存在感を高めることにつながっている。「共感的な人間関係」については、自己存在感と同様に、クラス全体で演奏することや複数のパートと一緒に演奏することが含まれる。また、生徒間の学び合いや生徒主導による学習活動の展開なども共感的な人間関係の育成には重要である。歌唱場面では「比喩的表現を用いて、他者と自己の感覚の一致を図る」といった、音楽学習特有の身体感覚の共有も共感的な人間関係に関わるものとして捉えられる。「自己決定の場」については、主に生徒の主体的な行動を導く手立てが抽出された。例えば、生徒自身に苦手な部分を取り上げさせて練習に取り組ませたり、練習方法を生徒に選択・決定させたりすることなどが挙げられる。また、教師主導型にならず、学習内容について常に生徒自身に自律的に思考させることも重要である。

音楽の授業における芸術性は、音楽教師の行動のなかで最も重要とされる「音楽的教授行動」、すなわち、模範演奏や指揮、ピアノ伴奏などの教師の音楽的表現の芸術性が高い場合に実現される。しかし、それ以外にも、合唱のパート間の響きを確認したり、楽曲の背景を探究した上で鑑賞したり、質の高い音源を吟味して用いたり、音楽に他の芸術形態を組み合わせて学習を展開したり、段階的に歌唱練習を行ったりなどの、音楽科が普段用いるような方法論が、高い芸術性の実現に大きく関わっている。

（伊藤 真）

4. 実習校の指導教員による考察—所見による情報交換が実習指導にどう機能したか—

(1) 附属中・高等学校

本校では、9月の前期と後期に、それぞれ2週間ずつの教科実習指導を行っている。若干の例外はあるものの、大部分の学生は本校と「附属三原中学校」との“入れ替わり”のパターンでの実習であった。本校では2名の教員で実習指導を担当しているが、実習をスタートするにあたって両名で話をしたのは「所見は参考にはするが、それによって学生1人1人の捉え方を固めてしまうのではなく、“ありのまま”をしっかりと見て評価しましょう。」ということであった。前期実習の学生については何の予備情報もなく関わり始めたので、2週間の成長は大きかったという印象は、例年通りであった。ただ、この2週間の実習が学生達の成長にどのような形で残り、次の実習へとつながっていくのだろうか？ということ、これまでは「確かめる術もなかった」訳である。それは、引き継ぐ相手校にとっても、同じ思いであったらうと思われる。

これまでは教員からの「前期実習はいかがでしたか？」との問いかけに対する実習生からの生の声からしか情報を知る術は無かった。しかし、今回は指導教員の所見を拝見することができ、参考になった。ただ前述のように、それだけに見方を限定しないように留意しつつ指導を行ったが、2週間の実習を修了して改めて所見を見返すと「あ、なるほど確かに。」という部分が大きかった。次のステップは「実習校の教員同士の横の連携」をより密にとっていくことではないだろうか。学生諸氏にとってはわずか2週間の期間内では、それぞれ大きく異なる実習環境・生徒実態に適應するだけで精一杯であろう。学校ごとに、それぞれ特色は大きく異なる。前期実習で学生のような面を育て、続く後期実習ではこのような指導を上乗せしていくという、「実習の“指導の連続性”」という視点を加えていくべき段階に来ているのではないだろうか。しかしこの研究を通して、附属学校同士の教員が直接顔を合わせて情報交換ができる機会が劇的に増えたのは、とても良い傾向であると感じている。

(原 寛暁)

(2) 附属三原中学校

本校では「附属中・高等学校」と2週間ずつの入れ替わりで教育実習指導を行った。

実習生全員に同じように指導しても得意・不得意な分野、または性格面や生徒指導力など非常に様々であり成長が多様である。わずかに2週間という短い実習指導の中で1人の指導教員が約5名の実習生に的確な実習するためには、実習生に関する情報がある方が指導しやすく、附属間による情報交換は非常に効果的であった。

また、実習校が変わるたびにスタートに戻るのではなく、前実習校で付けた力をさらに伸ばし、不十分だった部分を重点的に指導したりして2週間がより充実したものとなった。

今回の研究を通して、所見の様式を改善していくことでより効果的な情報交換ができると考える。抽出シートに即して「生徒指導力」と「芸術性」の2点を4段階で評価したものや所見を書いたものなど視点を絞ったシートにすると、より実態が伝わりやすいと思われる。

また、指導内容をより充実させるためには、実習生の所見に関する情報交換に加えて、実習前に附属間で教材や生徒の実態について情報を共有することが有効であると感じた。実習期間中の授業の題材を設定する際に、音楽の歌唱・器楽・鑑賞・創作の4つの分野に偏りが生じないように設定したり、互いの授業形態や指導案作成の方法などを把握したりしておけば、実習指導の計画もより内容が充実したものになることができたのではないかと感じた。

一般的に教育実習先が1校の学生も多い中、広島大学教育学部の実習生は異なる実態を持つ2校で実習をすることができるというメリットがある。そのメリットを存分に生かして限られた実習期間で力が付くよう、附属中学校は指導方法を工夫し実習生に力をつけていきたいと考える。そして実習生はその力を採用試験や現場での実践に生かしてほしいと思う。

来年度の実習がより充実したものとなるよう、附属学校間で交流できる機会を今後も大切にしていきたい。

(末廣 麻由子)

(3) 附属東雲中学校

本校は他附属と同様、9月に2週間ずつの実習を行っており、殆どは本校と附属福山中・高等学校との入れ替わりの実習であった。

附属東雲中学校は、いわゆる校則がなく、東雲憲章に基づいて考え行動するよう日々の教育を推進している。この生徒の姿を実感するために、昼食・学級活動など実習生と生徒が関わる時間を多くもつようにしている。そして実習期間は校内合唱コンクールの取り組み期間であり、授業は合唱の授業となる。授業でのパート練習や全体指導は勿論であるが、放課後練習にも関わらせている。

本校が取り組む合唱曲は、一般の中学校に比べて難易度が高いため、実習生にも指揮・発声・楽曲分析など、高い音楽的技能と指導力が要求される。また、生徒が真剣に歌うからこそ、実習生の指導についてシビアな指摘をすることもある。このことは、実習感想カードの記載内容にも表れており、実習生は生徒からの要求に応えざるをえない状況にある。だが、意欲的な生徒との関わりは何物にも代え難く、多くの実践力を身につける場となっていると考えている。

これまでの実習で、本校が1校目の実習生に比べ、2校目の実習生の方がうまく適応できないことがあった。この度、2校の教員が情報交換することで、実習生の音楽技能や適応力、性格やコミュニケーション力など、これまで以上に実習の様子がわかったことで、実習生への対応を考える参考になった。そして、わずか2週間の期間内では、それぞれ大きく異なる実習環境・生徒実態に適応するだけで精一杯であることを再認識した。

これまで2校でバランスをとりつつ重点を置く部分を分けることによって、音楽科教育の拡大と深化の両面を経験させるように指導してきた。今回の研究で、実習の指導の連続性を図るために、これまで以上に2校で連携して実習指導することは有効かつ重要であり、これにより実習経験の幅が広がり効果的であると実感した。その一方、1校で連続して実習をする方が2校目に適応する期間に深い体験ができるのではとも感じた。いずれにせよ、実習について様々な情報を得たとともに、実習のあり方を考える良い機会となった。

(松前 良昌)

(4) 附属福山中・高等学校

今年度、当校で後期実習を行った学生は6名で、その内前期が広島附属中・高だった者が1名、他の5名が東雲中であった。当然ながら、学校によって授業内容や教え方も大きく異なり、それがかえっていろいろな生徒の実態やそれに合わせた教え方の工夫を学ぶなど、実習生にとってメリットが多いことはこれまでとも言われてきた。

今年度新たに取り入れられた「生徒指導と芸術性抽出シート」と「ペア実習校との情報交換」が、どのように実習指導に効果があったのか簡単に振り返ってみたい。

前期の実習生は初めての实習ということで自分に自信が持てず、抽出シートを見ると生徒指導に関しては教員が思うより過小評価をしている者が多かった。逆に芸術性に関しては、ピアノや声楽など自分の専門分野においては過大評価をしており、教員の見方とは少しギャップがあることが感じられた。また、前期の実習校から送られてきた後期実習生への課題としては「指導案作成の綿密さ」や「音楽を指導するための技能」などが挙げられており、それらを踏まえて後期の実習生の指導にあたった。

後期の実習生は前期実習校での経験から、生徒指導やコミュニケーション能力はある程度身につけているので、特に実技指導のレベルアップに力を入れるようにした。まず、指導案に関してはかなり前から題材を与え、教材研究や内容を練る時間を多く持って、時間配分を含め指導案どおりの授業が余裕をもってできるよう指導した。次に、前期では授業の前日に範唱、範奏、伴奏などの実技のチェックをしていたが、後期では数日前にそれを行い、「生徒が実習生の演奏を聴いて、芸術性の高さを感じられるレベルに達しているか否か」という視点で、何度も練習を繰り返させた。その結果、後期の学生の芸術性の高さに関する記述数は格段に多くなり、教員が見てもそれが誇張ではなく、ある程度納得のいく内容であったように思う。

このように今回の取り組みで、実習の成果や課題がより具体的に明らかになり、実習指導に役立ったのではないだろうか。

(光田 龍太郎)

5. 大学での教育実習のまとめにおける実習生のコメントの集約

教育実習後に大学でまとめを行った。その際に、本研究の主軸である2つの視点について、①課題がどのように克服できたのか、②2つの視点の重要性をどのように感じているのか、を記述させた。以下に集約する。

(1) 「生徒指導の3観点」について

○始めは教師主導型で教えることが多かったが、生徒の活動が増えるように配慮した。
○合唱では自己存在感を与えたり共感的な人間関係を育成することは比較的実現しやすかったが、鑑賞などの座学の場合は実現しにくく、生徒と目を合わせたり積極的に声をかけたりすることを心がけた。
○自己決定の場を与える機会が少ない場合に、教師主導型の授業になりがちであった。
○ペア学習やグループ活動を取り入れることが課題だったが、パートリーダーを中心に練習を進めたり、生徒に課題を考えてもらったりすることによって克服できた。
○前期実習では生徒1人を指名して発表させるだけだったが、後期実習では全体を巻き込んだ発表の場をつくるように心がけた。
○2週間という短い期間で、共感的な人間関係を育成することはできなかった。
○生徒一人ひとりの名前を呼び、生徒全員に目が行き届くよう、グループ活動の際に各班に声かけをした。
○前期実習では「歌える子、できる子」しか見えておらず、表面的に出てきた音で判断して次のステップに進んでしまうことがあったが、後期実習では全員がどの程度できているのか、パート練習で一人ひとりがどの程度歌えているのかに目を向けることができた。

(2) 「音楽の授業における芸術性」について

○授業の芸術性を向上させるために、教師による演奏を増やした。
○ピアノ伴奏の仕方を研究し、効果的なものになるようにした。

(3) 2つの視点の重要性について

○特に重要だと感じたのは、「音楽教師の芸術家としてのふるまい」である。生徒はやはり

本物の音楽を聴けば喜ぶし、生徒の音楽経験を考えると鑑賞用のCDやDVDよりも、直感的に経験させることができる。

○生徒指導の3観点を実現するためには、生徒の授業外の様子を知ることも重要である。生徒の「できるようになりたい」という強い意思に応えられるように、芸術性の高い授業を行うべく教材研究をしっかりとすることが重要だと感じた。

○音楽は体感するものであり、教師が進んで範唱や範奏をすることはよいことだと思った。実際に、言葉で説明するよりも音楽で感じさせることによって、生徒の中に音楽がスッと入り込んでいくのが分かった。

○音楽科は生徒が想像力を膨らませて考えた意見をどれだけ引き出せるか、また出た様々な意見を生かしてどれだけ学びを深めることができるかが大切である。そのためには、生徒指導の3観点を意識し、音楽の授業における芸術性を高めることが大切だと分かった。
○よりよい音楽、高い芸術性をもった授業は、生徒の関心度や学習に大きな影響を与える。実際に、合奏の授業で、教師の音楽性や指揮の技術が高い場合、生徒も「よい合奏ができた」と振り返っていた。

○「生徒指導の3観点」は、生徒たちのやる気を引き出し、授業に集中させるために大変重要なことだと感じた。特に、音楽は生徒によって得手不得手の差が大きいため、授業を楽しいと思わせることが必要である。その上で、芸術性を高めていくことができればよい。
○鑑賞のとき、ただ音楽を聴くのではなく、しっかりと音楽を感じて聴くなど、教師自身が芸術性を大事にすることが大事だと思った。
○全員で1つの音楽を作り上げると言っても、一人ひとりの生徒が「自分も関わっている」という存在感がないと「音楽は楽しい」とは思えない。そのような存在感があれば、クラスの仲間と協力して1つの音楽を作り上げる喜びは大きい。生徒指導の3観点と音楽自体の芸術性をつなげながら授業を行うことで、授業の中だけの音楽で終わらず、社会に出た後の生涯学習としての音楽につながっていく可能性があると考えた。

○芸術性を高めることによって、音楽の本質をより深く学ぶことができると感じた。

(伊藤 真)

6. 総括

本年度の研究の柱に沿って、研究の成果と課題について述べる。

(1) 「生徒指導と芸術性抽出シート」の活用とその成果について

項目3で記述されているように、生徒指導の3観点が実現された授業の場面や芸術性が高いと感じられた授業の場面について、多くの具体的モデルが抽出されたことは、本年度の研究の大きな成果であった。これらの具体的モデルは、一般に優れた音楽の授業に内包されているものであり、指導教員たちも長年の経験や研究をとおして意識的にまたは無意識的に教授行動として体現しているものであろう。本年度の研究成果を、我々附属教員も、今後の実習指導に還元していく必要がある。

項目5で記述されているように、生徒指導と芸術性の2つの観点を意識して授業に取り組んだ際の課題とその克服方法がいくつか挙がっていることや、実習生が2つの観点の重要性を具体的な形で発見することができたことは、教育実習の成果として手ごたえのあるものである。

芸術性の観点に関しては、短い実習期間で実習生の課題を克服するのは限界があると感じる。実習生固有の資質やこれまでの音楽経験によるところも大きい。実習校においても指導教員による実技指導は当然行うべきであるが、この点に関しては、引き続き大学における専門的な指導と実習生自身の研鑽を望みたい。

(2) 実習生についての所見の交換について

項目4で記述されているように、ペアの実習校間で実習生についての記述による所見を交換したことは、実習生を共通のまなざしをもって指導することにつながり、有効であった。ただ各実習校には特色があるため、その情報はあくまでも参考にするという姿勢は、各附属校に共通している。

本研究の取り組みで、附属教員同士が会議で日頃の取り組みも含めて情報を交換し合ったことは、互いに良い刺激となり学ぶ点が多かった。今後も引き続き、少なくともペアの実習校同士でつながった教育実習として、指導にあたっていきたい。(増井 知世子)

7. 終わりに

本稿では、生徒指導の3観点を大切にされた教科指導を行う際に、音楽の本質である芸術性が薄れてしまうことを問題視し、より芸術性の高い授業を実現するための方法を探るという観点において、ある一定の成果を得ることはできた。また何より、教育実習の中で学生自身が生徒指導の3観点を大切にしながらも、芸術性の高い授業を行うことを目指して取り組んだことは、非常に意義深いことであった。

しかし理想を述べれば、生徒指導と教科指導との関係性については再考の余地があろう。つまり生徒指導の3観点は、音楽科においては、本来音を介した音楽的活動において生徒の心が動くという、芸術の本質の中から達成されるべきものである。芸術性の高い授業を受け、生徒が音楽によって感動するということは、自分が自分として生きているという感覚(自己肯定感)、共演者もしくは演奏者の思いや作者の思いなどとの共感(共感的な人間関係)、自分が自分としてこうありたい(自己決定)という思いにつながっていく。

今回実習生が挙げた「芸術性が高いと感じられた場面」では「質の高い音楽を提供した場面」とイコールになっているものが多く見られたが、それだけでは授業者の自己満足とも言われかねない。たとえ質の高い演奏ができなかったとしても、芸術の本質でもある音楽によって、人間の心が動くという経験を生徒にさせることができれば、芸術性の高い授業に近づいていくのではないだろうか。今一度、芸術性とは何か、音楽科の存在意義とは何かを実習生に考えさせる必要があるだろう。

(枝川 一也)

引用(参考)文献

文部科学省(2010)『生徒指導提要』教育図書
吉富功修ほか(1999)『音楽教師のための行動分析—教師が変われば子どもが変わる—』
北大路書房

要 約

音楽科における指導力の向上をめざした効果的な教育実習のあり方に関する研究
—生徒指導と教科専門の観点から— (3)

3年次にあたる本年度の研究の柱は次の2点である。第1点は、「生徒指導と芸術性抽出シート」の活用である。実習生はこのシートに、「①授業のどの場面で生徒指導の3観点が実現できたか」「②音楽の授業のなかで芸術性が高いと感じられたか」について、自己評価および批評会における他者評価の内容を記入する。第2点は、附属中・高等学校と附属三原中学校、附属東雲中学校と附属福山中・高等学校間で、実習生についての記述式の所見を交換することをとおして、実習生の特質や課題をより綿密に共有することである。

研究の成果は、第1点については、実習生が上記①と②の観点を意識して授業に取り組み、課題とその克服方法を具体的な形で発見することができた。また「生徒指導と芸術性抽出シート」の活用によって明らかにされた上記①②の観点が実現できている音楽科の教授行動の具体は、今後の実習指導における一つの指針となる。第2点については、研究の1, 2年次よりさらに附属間の交流を深めることができた。今後も引き続き、実習校同士でつながった教育実習指導にあたっていきたい。

Pre-Service Teachers' Teaching Skills of Student Guidance and Musical Instruction in Teaching Practice
(3)

The aim of this study were (1) extracting the specific behavior of student guidance (sense of presence, empathetic relationship, self-determination) and the artistic behavior from pre-service music teachers' lessons, and (2) examining the effect of information sharing on pre-service music teachers among practice schools. After each practical lesson, pre-service music teachers looked back on whether they could work out based on student guidance and reach the artistic level in their instructions or not. Mentors exchange observations on each pre-service music teachers with mentors in paired school. The main findings are summarized as follows: First, many types of teacher's behavior extracted from music lessons serve as a guideline for future teaching practice. Second, better practical work will be provided when practice schools have a good relationship and exchange information about teaching materials, lesson plans, and what pre-service teachers are like.